

論 説

古代ウイグル語文献に見える
bay について
——トウルファンの棉布の規格に関する一考察——

田 先 千 春

は じ め に

織物が古代ユーラシアにおいて果たした役割は大きく、「シルクロード」の呼称が示唆するように絹を筆頭とする織物類は、時に貴重な交易品として、時に徴税や取引の場における通貨として、常に重要な地位を保ちつづけていた。時代・地域による程度の差こそあれ、ユーラシアの経済活動を支える血液にも相当する存在であったといっていよい。しかしながら、その実態は必ずしも十分に明らかににはなっていない。

この小論では、中央アジア地域における織物の生産や流通の実相を描き出す試みの一環として棉織物を取り上げ、その実態を示す重要な側面である規格に関する考察を行う。

手掛かりとするのは、古代ウイグル語文献中の棉布の規格にまつわる重要な術語 bay である。筆者は古代ウイグル語については専門外であるが、文献学・歴史学分野における成果の蓄積を積極的に活用し、筆者が関心を払ってきた古代織物の出土資料を新たな検討材料として加えることで、この問題に新たな光を投げかけることができれば幸いである。

本稿で扱う古代ウイグル語文献とは、主としてトウルファンから出土したウイグル文字ウイグル語文献のうち典籍類を除く公文書や私文書である（以下ウイグル文書と称す）。これらの文書は、およそ西ウイグル時代（9—12世紀）からモンゴル時代（13—14世紀）に年代付けられる。従って、考察に際し対象とする時代・地域は必然的

に9—14世紀のトゥルファン地方が中心となるが、それと関連の深い他地域・時代の状況も適宜参照する。

なお、織物に関して本稿で使用する「規格」という語は主として寸法を指すものに限定し、品質等の議論はこれを含まない。「計量単位」という語を用いる際には寸法を、「計数単位」という語では反物の個数を念頭においている。また便宜上の用法ではあるが、「反物」という語では特に断らない限り、広く巻物状の織物一般を指すこととする。

第1節 棉布の匹端制問題—bay をめぐる議論

ウイグル文書に通貨の機能を帯びた böz「棉布」がしばしば登場することは、周知のとおりである⁽¹⁾。それらの中に bay という語と組み合わせられた例が複数見出されるが、これが中国本土の匹端制に関わる表現であることをいちやく喝破したのは山田信夫氏であった〔山田1965：98-99〕。氏は、本来「束、帯、包み」⁽²⁾を表すこの bay という語が数詞 iki「2」を伴って「iki + bay/bayliq + böz」という形をとる場合、従来いわれてきたような「2束の棉布」の意ではなく「2束ものの棉布」を表すと考えた。ある証文中の特記事項を根拠とした解釈である⁽³⁾。例えば älig iki bayliq böz のように、さらに älig「50」といった数字を冠して現れれば、「52束の棉布」ではなく「50の2束ものの棉布」を指すという。

さらに氏は、①『大慈恩寺三蔵法師伝』（以下『慈恩伝』）のウイグル語版に見える iki böz「2棉布」が同書の漢語版では「白氎兩端」に対応し、かつウイグル語における「布帛の長さを示す単位としては bay しか認められない」ことから iki böz = iki bay/bayliq böz = 「白氎兩端」とみなすことができ、bay は漢語の「端」にあたること、②iki bay/bayliq böz という一種の単位が「2端」であれば、中国内地の「2端 = 1匹」という匹端制に照らし合わせ、これを「1匹」に相応させ得ること、を提唱する。ただし、具体的な長さについてはさらに詳察を要すると述べるにとどまった。

ウイグル語文献学者のラシュマン氏 (Simone-Christiane Raschmann)

【bay に関する主要な説の比較】

	bay		iki bay		iki yarım bay	対応する匹端制度
山田	半匹 = 1 端		1 匹 = 2 端			1 匹 2 端制 4 丈匹 / 2 丈端
荒川	半匹 2 丈	半端 2.5 丈	1 匹 4 丈	1 端 5 丈		絹匹布端制 4 丈匹 / 5 丈端
松井	半匹 2 丈		1 匹 4 丈		1 端 5 丈	絹匹布端制 4 丈匹 / 5 丈端

も、1995年の著作でウイグル語文献から見たトゥルフアの棉について総合的な考察を行った際には、山田氏のこの説を踏襲している[Raschmann 1995 : 42-44]。

一方、荒川正晴氏は、当時トゥルフアのウイグル社会では唐西州時代からの中国内地の織物規格が受け継がれていた蓋然性を指摘した上で、山田氏の言う中国内地の「2 端 = 1 匹」の匹端制は先秦以来のものであるが北魏時代には既に崩壊しており、唐代に至り「絹匹布端」の制度となっていた点に注意を促している[荒川1994 : 112-116]。すなわち絹織物は匹（幅1尺8寸、長さ4丈）、布（絹以外の織物）は端（幅1尺8寸、長さ5丈）の単位をそれぞれもってすべし、という唐制の規定である⁽⁴⁾。また同地出土の唐代の漢文文書から確認できる、「半匹もの・半端もの」が「1 匹もの・1 端もの」と並んで流通していたという事実と照らし合わせ⁽⁵⁾、荒川氏はウイグル文書にいう bay は半端もしくは半匹のものにあたる高級品向きの長さの短い規格であり、iki bay は1 端もしくは1 匹に相当する一般品のための長さの長い規格であったと推論した⁽⁶⁾。

以上を踏まえ松井太氏は、文書中に現れる iki yarım baylıq böz「2.5bay ものの棉布」という表現に着目し、bay = 半匹 = 2 丈、iki bay = 1 匹 = 4 丈、iki yarım bay = 1 端 = 5 丈と考えれば、ウイグル文書中の棉布の規格が唐代の布帛の規格体系と整合的に説明できると提案する。山田氏同様 iki bay を「匹」に対応させるものの、bay を無条件に「端」に当てる解釈は排除する[松井1997 : 104-105]。

以上が bay に関する先行研究の概略である。これらの議論が、歴史学的・文献学的な知見の上に立った、いずれも画期的な指摘を

含む重要なものであることに疑問の余地はない。ただこれらを通観するにおよんで、現実に通流する織物の実体にはほとんど関心が払われてこなかった点を指摘することはできよう。

ウイグル文書中の棉布が多くの場合、貨幣の機能を担って流通していたことは上述のとおりである。その取引に際して、例えば100を越えることすらまれではない数量の棉布が、紙上の取引などではなく実体を伴って流通していた以上、iki bay なり bay なりの棉布の形態は、その運用において一定の合理性を有するものでなければならない。従来議論されてきた1匹と半匹、あるいは2丈・4丈・5丈といった各種の棉布は、現実の取引の場において各々如何様に区別されて機能し、また流通していたのであろうか。

以上のような観点から、本稿ではまず当時の棉布の実体を明らかにして bay 表現との対応を考察する。次いでウイグル文書中の用例を再検討し bay という語の機能をより正確に決定することを目指す。

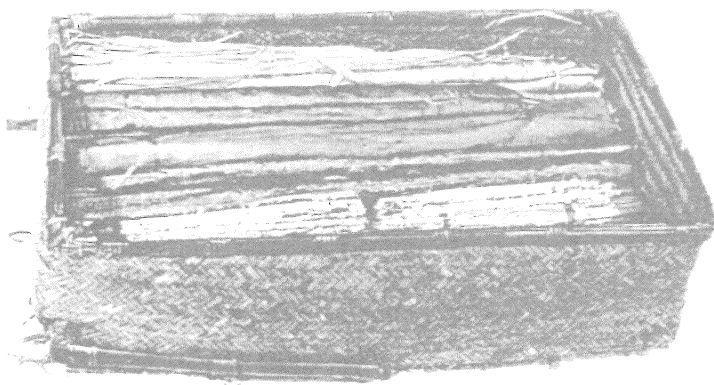
第2節 棉布の形状と bay

1. 出土資料から見た反物の形状

1972年、湖南省の長沙馬王堆一号漢墓から出土した文物の中に、46本もの巻物の形状をした平織・綺・錦等を含む各種の絹織物があった。これは象徴的な性質を多分にそなえる随葬品であったため、長さこそおよそ40—80cmと短かいものの、形状については非常に興味深い情報を伝えている。報告書によるとこれらは「2本、あるいは3本・5本の細い荻の茎を芯にして両端からまん中に向かって巻いてゆき、さいた細い絹でそれを3ヵ所でくくり、1匹の形をとった絹の反物を象っている」という〔馬王堆（上）：87, 95〕【図1】。これこそが、漢代における織物の反物「一匹」の形状であったと林巳奈夫氏は判断している〔林1976：105-106〕。

これまで十分に注目されることはなかったが、ここで明らかになった織物一匹分の形状は重要である。日野開三郎氏は『左伝』昭公26(B.C. 516)年の条の「幣錦二兩」に対する杜預の注「二丈爲一端、

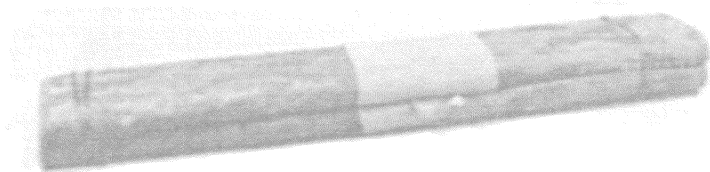
【図1】[馬王堆(下)：図版217]より



二端爲一兩。所謂匹也。」を挙げ、そもそも「匹」とは「兩」に代わって用いられるようになった語であるという[日野1989：68]。ここにいう匹(兩)・端は一般に長さを示すとのみ解せられてきたふしがある⁽⁷⁾。しかしながら、馬王堆出土の絹の巻物を目の当たりになるとき、「二端爲一兩」が単に長さを指しているだけではなく、むしろその形状に由来する表現であったことに思い至るのである。

これは林氏の指摘する『礼記』雜記「納幣一束、束五兩、兩五尋。」⁽⁸⁾に対する鄭玄の注をみればさらに明白となろう。そこには「兩兩合其卷、是謂五兩。八尺曰尋、一兩五尋、則每卷二丈也、合之則四十尺。今謂五匹、猶匹偶之云與。」とある⁽⁹⁾。林氏の解釈[林1976：105-106]に、補足してこれを説明すれば「巻物を二つずつ合わせ(た反物があり)、これを五兩(取り揃えれば一束という単位になる)と(礼記では)言っているのである。八尺のことは一尋と呼ぶ(のであるから)、一兩は五尋(であると礼記がいうの)ならば(すなわち8尺×5尋=40尺=4丈であり、二つずつ巻いた反物のうちの)ひと巻分はそれぞれ二丈である。これを(二巻分)合わせているのだから(「一兩」は)四十尺である。今日(後漢時代)では(「五兩」という呼び方ではなく)五匹というが、(この「匹」とは)ひとつがい、といった意味だろうか。」となる。

【図2】[紡織品考古：193]より



本来の「匹端」という語は、「寸、尺、丈」のごとく設定された厳密な長さを示す計量単位であることに先立ってまず、反物の形状を素直に表現したところから生まれた形状表現であった点を、ここに強調しておきたい。

さて、この両端を巻いた反物（以下便宜上これを「両端巻き」と称し、これに対する、片側のみから巻いて1本の筒状にしたものを「片端巻き」と称する）の形状が必ずしも漢代に限らなかったことは南昌寧靖王夫人呉氏墓（1504年埋葬）出土の明代の綾に認められる通りである[紡織品考古：192-193, 樊2002：175]。これは幅59.5cmないし60.2cmの綾の反物2本で、そのうちの1本は長さ680cmであることが確認されているが、その形状は上述の漢代の絹と同じく両端から巻いた2巻きが中央で合わさった形をしている。それぞれの巻きは円筒形ではなく平たい板状をしており、中央で合わさった両方の巻きは糸で縛って固定されている【図2】。

さらに、このような両端巻きの織物は中央アジア出土の7世紀の壁画にも確認できる[アリバウム1980：13, 67-68]。サマルカンドのアフラシャブ第23発掘地点第1号室の壁画に描かれた、チャガニアン⁽¹⁰⁾からの使節とされる男性像が手にする連珠円文錦の巻物がそれである【図3】。人物像の大きさとの比率から考えて、その反物の寸法は上述の南昌の綾とほぼ同一であろうことがわかる。その特徴的文様から、この錦がおそらくササン朝ペルシャ製であることが既に指摘されているが[影山2002：44-45, Mode 1993：59-62]、このことは織物の両端巻きの形状が広い範囲の地域で受け入れられていたことを示すと考えてよからう⁽¹¹⁾。同時に、この形状が馬王堆や南昌の出土品のような随葬品に限ったものではなく、現実に通じて

【図3】[アリバウム1980:67]より



いたものであることも示唆している。

以上のように、漢代から少なくとも明代に至るまで、また中国内地からトハリスタンの広範囲にわたってこのような両端巻きの形状が、必ずしも連続的とは言えないまでも、存在していたことが確認できるのである⁽¹²⁾。

2. 両端巻きの形状と規格との関係

反物の形状としての両端巻きの存在は上の例で確認したとおりであるが、織物というきわめて多種多様な産品にあっては当然のことながら、あらゆる種類のものが両端巻きにされていたはずもなく、その寸法や性質（品質や利用目的）によってそれぞれに応じた最適の形態が取られたことは充分推測される。そのなかにあって両端巻きの形状がかくも広範囲にわたって採用されていた背景には、然るべき理由があったはずである。筆者はこれを、その形状と規格との密接かつ合理的結び付きの結果とみる。

中国における絹織物の規格については、佐藤武敏氏に次のような考証がある⁽¹³⁾。先秦から魏晉南北朝時代までの規格は幅2尺2寸・長さ4丈（cmに換算しておよそ幅50—55cm・長さ916—996cm。以下同様）を1匹とする。唐代では両税法施行以前は幅1尺8寸・長さ4丈

(幅53cm・長さ1,179cm)、両税法施行以後は幅1尺9寸・長さ39尺(幅56cm・長さ1,150cm)である。宋代には、幅2尺5寸に対し長さは40尺の場合と42尺の場合(幅64cm・長さ1,274/1,338cm)とがあった。

時代による変遷はあるが、1匹の規格は幅50—64cm・長さ916—1,338cmの間に収まっており、これを大きく逸脱することはない。織物はその製作技術の性質から、幅の設定に関しては一定の制約があるものの、長さに対しては理論上は無制限といえる⁽¹⁴⁾。にもかかわらず、千年以上にわたって長さが1,000cm前後の設定を大きく越えないという事実は、織物の規格を考える上で興味深い。この数字の意味するところは何か。それは、「着分」という概念で説明され得るのではなかろうか。「着分」とは一般に上下の衣服1着分(上下続きの長衣も含む)の製作における織物の必要にして十分な量のことである。

現代のいわゆる洋服の服地で着分といえば、標準的に150cm(幅)×250—270cm(長さ)という量を指す。8—9世紀のモシチェヴァヤ・バルカ古墳からほぼ完全な形の錦の長衣が出土しているが、試みにその構成図から着分を計算してみると、56cm幅(唐代両税法施行後の規格)の反物に換算して長さはおよそ610cmとなる⁽¹⁵⁾。このような数字は、楼蘭出土で唐代後期に年代付けられている長衣の概算でも56cm×621cmとして確認できる⁽¹⁶⁾。面白いことに、上記の現代服地の分量を唐代の規格に換算すれば56cm×670—723cmとなり、これは古代の長衣に近接した数字である。着分の厳密な分量は、時代・地域による服飾文化や人間の体型の差違に基づき個別に算出されるべきではあるが、人体を被うための最も基本的な上下一揃いの分量はおおよそ60cm×600—700cm内外であったと見なすことが可能であろう⁽¹⁷⁾。そして、これらの着分がまさに中国の匹端制における半匹、すなわち両端巻きの片側分に相当するのである。

たとえ通貨であろうとも最終的には消費物資としての価値の裏づけが必要な織物の規格にとって、消費に際しての最低必要量の保持は必須である。その最低必要量こそが(ハギレの切り売りなどは別とすれば)着分の分量であり、それがすなわち半匹に設定されていた

ことを、上記の着分と半匹の数値の対応が如実に示しているとは言えまいか。これは日本の着物における「着尺」の概念にも明らかに反映されている。「着尺」とは着物一枚を仕立てるための、通常およそ幅36cm・長さ1,200cmを一反として織り上げた布地であり、その一反に仕上げてある布を「反物」とも呼ぶ。さらに、そのような「反物」二反分の長さを匹という〔きもの用語：198-199, 337, 420〕。日本の織物の伝統的な形状については現時点では未確認であるが、少なくとも織物の規格寸法と着分の密接な関係についての雄弁な証拠であることは間違いない。

この最低必要量である着分を片端巻きとするのではなく、両端巻きの形状にすれば着分の倍量をひとまとめにして携行できる。1着分を販売する折には、両端の出合う中央部分で裁断すれば済む。同量の1匹ものを片端巻きにし、そこから半量を計量して売買する場面を想像すれば、両端巻きにおける簡便さと正確さは明白である。両端から巻いた織物の形状は、現実の運用において非常に理に適ったものであった。幾多の改訂を被りながらも織物の規格が一定の数値を保持し続けてきた事実には、織物の形状と結び付いたこうした合理性の裏づけがあったといえよう。

このように、中国の匹端制においては着分という分量を基にして規格と形状が密接に関係していたことが推測されるのである。つまり、1着分＝両端巻きの片側＝1端であり、それを2つ合わせれば1着分＋1着分＝両端巻きの両側＝1匹という関係が成り立つ。時の為政者によって1着分に相当する寸法や計数単位名称の規定が改訂されることはあっても、上の意味における「2端＝1匹」の概念は両端巻きの形状が存続する以上、変化することは無かったはずである。

とすれば、先秦時代からの「2端＝1匹」の匹端制は北魏において既に変容しているとする従来の指摘は、織物の計量に主眼を置き計数単位と即応させる税制上の観点からは確かに正しいが、本来「匹端」という語に備わっていた形状表現としての機能を無視したところに問題がある。隋唐時代の絹匹布端制では「端」という語に

新たに全く別の機能が与えられたことは事実である。しかしこれは本来の「2端=1匹」の概念が示す織物の両端巻きの形状が消え去ったことを意味しない⁽¹⁸⁾。ふたつの「端」は別物と言ってもよく、区別して扱う必要があろう。

3. トウルフানের棉布の形状

以上のような中国における織物の形状に鑑みて、前近代のトウルフアンで流通していた棉布もまた、両端巻きの形状をしていたと想定しても差し支えないのではないか。確かに、上述の出土例はみな棉ではなく絹織物である。しかし、そもそも中国本土においても絹匹布端制が登場するまでは、絹と布とを区別せず匹制が用いられていたのであるから、「2端=1匹」の両端巻きの形状も両者に共通していたと考えるのが自然であろう。

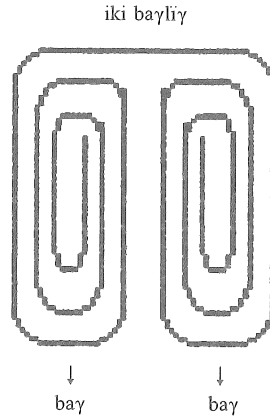
トウルフアンは唐の支配下に入った際に棉布が徴税対象となり、唐の匹端制が導入されたであろうことは既に指摘されるとおりである〔荒川1994：113-116〕。唐の匹端制とは前述の絹匹布端制である。実際、トウルフアン出土の漢文文書（以下トウルフアン漢文文書と称す）における棉布の計数単位に着目すると、トウルフアンが唐の西州に組み込まれる640年以前と見なされる文書には、「匹（疋）」を用いた例しかみとめられない。しかし、663—707年に属すると考えられる《唐縹布帳》64TAM35:22〔吐魯番7：490-491〕には「端」が現れるのである。およそ730—772年頃に年代付けられる《出納錢物帳歴》73TAM506:04/20(a)〔吐魯番10：317-318〕では再び「疋」が使用されている。

このような計数単位の変遷は布に関しても見られ、618—684年に年代付けられる《唐課錢帳歴》73TAM206:42/9-18〔吐魯番5：298〕で「端」が初見されるまでは「匹（疋）」が用いられている⁽¹⁹⁾。「端」は《唐縹布帳》で布に対しても用いられているが、一方で660—673年とされる《得布准錢帳》64TAM4:1〔吐魯番6：440〕では「疋」も使用されている。

限られた資料数でのことであり断定的な結論を導くのは難しいが、

西州時代以前にはこのような計数単位としての「端」の使用例が全く無いという事実は、これが唐の絹匹布端制に基づいて新たに導入されたものであることを強く示唆する。そうであるならば同時に、この唐制の導入に伴って中国内地の両端巻きの形状が、トゥルファンの棉布に対しても適用されたと考えるのが妥当であろう⁽²⁰⁾。遅くとも西州時代以降のトゥルファンにおいては、棉布は中国内地の布帛と同じく両端巻きの形状をしていたに違いない。

【図4】匹端と bay の図解



さて、以上のようにトゥルファンの棉布の形状を中国内地の両端巻きであると想定することで、問題の bay ならびに iki bay の理解はより容易になる。その形状と名称を考え合わせれば、文字通り両端に iki bay すなわち「2つの束」を具えた反物の姿がおのずと浮かぶ（【図4】参照）。その場合、従来 bayliq あるいは bayliq と異なる読みがなされてきた接尾辞についても若干の検討が必要かもしれない⁽²¹⁾。接尾辞+liq の機能は、名詞に「(使用) 目的、目標、予定、方向性」の意味を付加し、一方、+liq は基礎となる名詞との所有・所属・帰属などの関係を表すのが代表的機能であるという⁽²²⁾。本稿ではこれまで SUK に則り iki bayliq と表記してきたが、その意味するところが「2束を具えた」であることが明らかになった今、これに対して iki bayliq という読みを採用する方が、その義に則していると言えよう。

このように棉布の形状と bay の関係を捉えることによって、初めて意味を帯びてくる文言がウイグル語文書にはある。次に挙げるのは quanpu「官布」と呼ばれた西ウイグル王国公認の通貨棉布を修飾する文言の実例である。

【quanpuの修飾文言】 * [森安1989, 2004] [SUK vol.2] に基づき作成。

a . qoço kiinindä yorir iki uči kinlig	otra yirtä tamyalıy	yüz	qanpu-qa
高昌市場で通用する 両端に間道があり	中央の地にタムガ印のある	100	官布で
b . ///kitini yorir iki uči kinlig	otra tamyalıy	üç ming iki yüz 'älig	qunpu-qa
…市場で通用する 両端に間道があり	中央にタムガ印のある	3250	官布で
c . qoço kidini yorir iki uči kinlig	otura tamyalıy	üç ming biş yüz	quanpu-qa
高昌市場で通用する 両端に間道があり	中央にタムガ印のある	3500	官布で

* 文書番号 : a . Sa01, b . Sa03, c . Sa04

従来はここに見える「中央（の地）にタムガ印のある」の意味する状態が明確ではなかった。しかしひとたびこの quanpu を両端から巻いた反物と想定すれば、双方の巻きの出会う中央に官印であるタムガ印を押してあることは自明であり、一目にして規格の保証されていることが示される。たとえそれを半分に裁断し 1 着分にあたる「半匹もの」にしたとしても官印の半分が双方に残ることになり、まことに合理的な押印の仕方である。山田氏の「2 端 = 1 匹」に対応させる案はやはり本質を見事にとらえたものであったといえよう。

以上、本節では出土資料に基づき、中国内地の古来の匹端制が、反物の両端巻きの形状に由来するものであることが確認された。トゥルファンの棉布においても両端巻きの形状が、遅くとも640年に西州が設置され唐制が導入された時期には、適用されていたに違いない。この形状は、問題の iki baylıy 表現とも見事に合致する。トゥルファンに導入された中国内地の両端巻きの形状が、いずれの段階においてかウイグル語に透写された結果が、この bay 表現となったと推測されよう。

第3節 ウイグル文書における棉布の計数単位と bay

前節での考察により、従来とくに唐の絹匹布端の制に照応させて長さを示す計量単位と見なされてきた bay を含む表現が、むしろ織物の形状に由来して両端巻きの「2 端 = 1 匹」に対応するもので

あるという結論を得た。とすれば、そのような bay 表現は正確にはどう解釈すべきなのか。本節ではウイグル文書中における計数表現に注目し、さらに検討を加えたい。なお、論の煩雑さを避けるため、本節で「匹」「端」という場合には特に断らない限り上述した形状表現に重きを置く「1 匹 = 2 端」製の匹端をいい、徴税に際して厳密な長さを規定する唐制その他の絹匹布端製のそれは指さない。

1. 「数字 + (yarim +) böz」

前述のラシュマン氏は棉布の関連記述をウイグル語文献から網羅的に抽出し、調査・考察を行っている。その資料は113点を数える。

氏によると、その中に「数字 + böz」、あるいは「半分」を意味する yarim を用いた「yarim + böz」や「数字 + yarim + böz」という、数量を直接冠した表現が実に147カ所に見られるという [Raschmann 1995 : 40-42]。文書中で具体的には、例えば「…通貨用の棉布が必要になって、…X棉布（を取引価格として定めた）」といった形でしばしば見られることなどから⁽²³⁾、これらの数字Xが、特定の単位を伴ってはいないものの、長さや重さといった量ではなく、明らかに通貨用として一定の規格を帯びた棉布を指してその個数を表していることが分かる。

正確な解読にはなお困難を伴う断片的資料の多いウイグル文書であり、またラシュマン氏は一部の宗教文献も分析対象に含めていることから、そこでの在証例の多寡をもって即、その表現の現実の使用状況を判断するには慎重であらねばならないが、筆者が調べた限りにおいては、ラシュマン氏の調査した全113資料のうち実におよそ76点までが何らかの形でこれらの「数字 + (yarim +) böz」表現を含んでいた⁽²⁴⁾。当時のウイグル社会においては、単位（量詞）を伴わないこのような計数表現がごく一般的に使用されていたと理解しても大過あるまい。

さらに注目すべきは、「数字 + (yarim +) böz」表現例（全147件）に占める yarim böz「半分の棉布」の存在である。その在証例は、「数字 + yarim + böz」すなわち「〈X + 半分〉の棉布」の表現まで加

えると、14文書中の22ヵ所にのぼる。このような「半分もの」は、唐代のトゥルファン漢文文書や10世紀前後の敦煌漢文文書中の「半匹もの」の存在を十分に想起させるが⁽²⁵⁾、yarim 表現のこの少なからぬ用例は、「半分もの」の存在が市場において決して例外的なものではなかったことを示すと見てよかろう。これらの棉布はやはり、「数字+böz」で表される両端巻きの「1匹もの」に対して、それを中央で裁断した「半匹もの」という形で流通していたと考えるのが自然である⁽²⁶⁾。

2. 「数字+iki bayliḡ+böz」

棉布が計数のための特別な単位（量詞）を伴わず数字を直接冠する例が多い一方で、本稿で問題とする「数字+iki bayliḡ+böz」の表現はラシュマン氏の挙げた全113資料の中に、わずか4文書中の4ヵ所、bayliḡの代わりに接尾辞+liḡを伴わない bay を用いた例を含めても5文書中の6ヵ所に見られるだけである⁽²⁷⁾。そして、その全てが何らかの契約に関わる文書であった⁽²⁸⁾。これは「数字+(yarim+) böz」に比べてあまりにも使用例が少ない。iki bayliḡの表現の少なさは、これがたとえ中国の匹端制に由来しているとしても、漢文文書において必ず付される「匹」のような計数単位とは根本的に異なる使われ方をしていることを示すと考えてよい。とすれば、iki bayliḡ 表現は一体どのような機能を持っていたのであろうか。

前節で検討したとおり、iki bayliḡ 表現は本来、反物の両端揃った状態を表す。一方、当時トゥルファンの市場には yarim 表現が示唆するような「半匹もの」が少なからず存在していた。これらを考え合わせるとき、iki bayliḡ 表現の機能として想定され得るのは、売買等の契約に際してその織物が「半匹もの」ではなく「1匹もの」であることを特に明示したい場合の、保証文言としての働きである。実際、bay の現れる表現を眺めれば、資料数が多くはない点を考慮しなくてはならないが、その中でも日常的とは言い難い高額取引が目につく。これらの文書中での iki bayliḡ böz の匹数は、100匹が2

件 (Sa09とSa10、ともに売買契約)、50匹が1件 (Sa29、売買契約)、2匹が1件 (Lo15、消費貸借契約)、37匹が1件 (Mi23、領収証⁽²⁹⁾中で、37 böz という表現に対する注記として「この棉布は iki bayliḡ böz である」

【表1】「数字 + (yarım +) böz」の頻出上位例：[Raschmann 1996: 40] より抽出・作成

	「数字 + (yarım +) böz」の用例	出現数
1	bir böz (1 棉布)	× 59
2	iki böz (2 棉布)	× 18
3	yarım böz (半分の棉布)	× 15
4	on böz (10棉布)	× 7
5	biş böz (5 棉布)	× 6
6	bir yarım böz (1 と半分の棉布)	× 4
6	otuz böz (30棉布)	× 4
6	yüz böz (100棉布)	× 4
9	ygrmi böz (20棉布)	× 3

と記載された部分)であった。これは、「数字 + (yarım +) böz」にあつては、半—2匹という少ない匹数の用例 (96例) だけで全体 (147例) の65%を占める状況と対照的である (【表1】参照)。この種の契約文書はその性質上、対象物件がどのようなものであるか仔細に記載されるのが常である。高額で重要な取引に際しては、「半匹もの」を含め各種の棉布が流通しているトゥルフアン市場において、その中でも特定の「通貨用棉布」であり、かつきちんと両端の揃った「1匹もの」であることを明示する必要が殊更にあつたはずである。bay が iki を伴わずに用いられる例 (「数字 + bay/bayliḡ + böz」のような表現) が現時点では確認できない点も⁽³⁰⁾、このことを裏付けよう。多額の重要取引において「半匹もの」を多数重ねることは現実的とはいえない。

以上の点から考えて、iki bayliḡ 表現が形状を表す機能に重点を置いていたという前節での指摘を一步進めて、これは取引に用いられる通貨用棉布が正しく両端の揃った「1匹もの」である旨を明記したい場合にのみ加えられた、いわば長さの規格保証のための修飾文言であると結論付けることができよう⁽³¹⁾。それに対し、「数字 + (yarım +) böz」こそが、通常に使われる計数表現であった。

従つて、前述のウイグル語訳『慈恩伝』において漢語「両端」が iki böz と対訳される箇所も、従来の説の iki böz = iki bay/bayliḡ böz = 「(高級品の) 棉布の半匹もの × 2」でも「(古来の匹端制で言う) 棉布

2 端 = 1 匹」でもなく、文字通り「2 (匹) の棉布」であり、敢えて bay の表現に換言して解釈するならば、iki böz = iki iki bayliḡ böz = 「(両端揃った) 1 匹もの × 2 = 2 匹の棉布」とすべきであろう。言うまでもなく、この『慈恩伝』中の漢語「端」は絹匹布端製の「端」、すなわち絹以外の織物の反物 1 本分をさす計数単位としての「端」ということになる。

3. 契約文書に見えるその他の規格保証の修飾文言

このように iki bayliḡ 表現を長さの規格保証を示す修飾文言と解釈した場合、参照しておくべき表現がふたつある。ひとつは、前掲の quanpu に係る文言に含まれる iki uči kinlig という表現であり、もうひとつは böz に係る ikilik という表現である。

前者の iki uči kinlig とは「両端に間道があり」と訳され、織物が盗剪されていないことを示すために予め織りこまれた彩色の筋が織物の両端に備わっている状態を指す [森安1989: 59-60]。後者 ikilik は、ikilik böz という形でやはり契約文書に 2 件が確認され、iki bayliḡ 同様「2 端 = 1 匹」を意味すると解されている⁽³²⁾。ikilik については、ラシュマン氏による「ことによると iki bayliḡ の短縮形か」というコメントもある [Raschmann 1995: 44]。その用例は、次のとおりである。

【böz の修飾文言】

* [森安1989, 2004] [松井1997] [SUK vol.2] に基づき作成。

d. lükčüng kidin-ini yörir šuu-luy tamya-liḡ üč otuz	ikilik	bözingä
ルクチュン市場で通用する 書銘がありタムガ印のある 23	匹の	棉布で
e. lükčüng kidini yörir šuu-luy tıyaliḡ yüz yitmiş	ikilik	yoriq böz-kä
ルクチュン市場で通用する 書銘がありタムガ印のある 170	匹の	通行棉布で

* 文書番号: d. Sa06, e. Sa07

これを前掲の quanpu の修飾文言の例と対照して各文の構成要素を見比べると、quanpu に冠される iki uči kinlig と böz を修飾する

ikilik との対応に気付かれよう。文中での配置こそ違え、ikilik も iki uči kinlig と同様に織物が両端の揃った完全なものであることを示す要素であるという、より積極的な解釈があるいは適当かもしれない⁽³³⁾。iki bayliŋ/bay 表現が契約文書に限って見られることは既に言及したとおりであるが、上の計 5 例も全て契約文書におけるものである。これら 3 種の表現を、同様の文書において同様の機能を持つ一連のものであると見なすことは充分可能であろう。

ウイグル文書の「古さ」「新しさ」の指標に関して森安孝夫氏のまとめた一覧表等を参考に〔森安1994：63-83, 同2004：7-17〕、これらの表現の現れる年代をまとめると以下のごとくである。概要としてまず、quanpu と böz は決して混在していたわけではなく、その間にはいわば「時代的住み分け」が明確に存在していた。quanpu は西ウイグル時代の文書（9—12世紀）に特徴的に現れ、他方、通貨棉布としての böz はモンゴル時代の文書（13—14世紀）に集中していること、またこの現象がトゥルファンを取り巻く政治状況と通貨の変遷に密接にかかわっていることが既に詳細に論じられている〔森安2004：第5、6節〕。上掲の個々の文例について言えば、iki uči kinlig に関する a. の文書は西ウイグル時代であることが確証されており〔森安1994：82〕、b. と c. はより遅い時代にも属し得る半草書体で書かれるがモンゴル時代に属することを示す指標（モンゴル指標）はない。一方、ikilig 表現のある d. と e. の文書は、b. や c. と同じく半草書体であるがモンゴル指標を有する。さらに iki bayliŋ/bay 表現はといえば、Sa09, Sa10, Sa29, Lo15, Mi23 の全 5 例のうち、Sa09, Sa10, Sa29 はモンゴル時代に属する草書体で書かれておりモンゴル指標も有する。Lo15 と Mi23 も草書体であるが、モンゴル指標は確認されておらず、ただ、新しさの指標であるニシャン書式が確認される。以上に基づけば、ごく大雑把にはあるが〈iki uči kinlig→ikilig→iki bayliŋ〉の順でこれらの規格保証文言が出現することが窺える。

11世紀末のカーシュガリーの史料からも見て取れるように、quanpu は西ウイグル王国の通貨として国家の積極的管理下にあり⁽³⁴⁾、そ

の規格保証も厳格であったに違いない。しかし、モンゴル時代に入ると国家の関与から離れたことで通貨棉布としての地位に転換が起こるが、それは、①quanpu の肩書きを失って単なる「(通行) 棉布」となり、②規格保証として付されていた間道が失われ、③ウイグル王のタムガの押印が、何れかの書銘と押印の組合わせに替わり、④やがてその書銘や押印も失われ、⑤ついには両端保持の文言のみが残る、という形で進行したことが想像される。このような通貨棉布の規格保証の文言の推移は、トゥルフানের社会・経済的秩序が西ウイグル王国からモンゴルのそれへと変化したことやそれに伴う現地通貨の実態の変遷を具体的に物語っているといえよう。

以上、本節の考察では、ウイグル文書においては「数字 + (yarim +) böz」という表現が棉布の通常の計数表現であったこと、また、yarim表現が示すように「半匹もの」の棉布が「1 匹もの」に並んで市場に出回っていたこと、一方、問題の iki bayliḡ 表現は反物の形状を表す機能に重点があり、それが契約文書等において用いられる際には、取引される棉布が正しく両端を具えた「1 匹もの」であると明示する規格保証の働きが主であったことを結論付けた。これらのウイグル語表現と棉布の実物との対応関係を示せば、

「(両端巻きの) X匹」= X böz = X iki bayliḡ böz

「(両端巻きを中央で裁断した) 半匹」= yarim böz = bay/bayliḡ böz
ということになる。

お わ り に

ウイグル文書中の棉布の規格に関する bay 表現については従来、中国の匹端制、特に唐代の絹匹布端制に即応させ、計量単位としての機能が強調されてきた。本稿では視点を変えてまず、前近代のトゥルフアンに流通した棉布の形状について検討し、中国内地の状況に鑑み、それが両端から中央に向かって巻いた両端巻きの形をしていたと推測した。さらに、bay はそのそれぞれの巻きをさし、「2 巻

きを具えた」の意の iki bayliḡ とは、中国での元来の匹端と同様に反物の形状を表す機能に重点があり、長さという点においては当該時期のトゥルフアンにおいて認められた規格を結果的には含意していたにしろ、唐制をはじめとする中国内地における長さの規定を含む絹匹布端制に一律に対応させるのは難しいことを指摘した。

ついでウイグル文書中での用例について、iki bayliḡ 表現と「数字＋(yarim＋)böz」表現とをあわせて考察し、棉布の通常の計数表現としては単位無しの後者が多く用いられていたこと、その中であえて iki bayliḡ 表現を付加して用いるのは「iki bayliḡ = 1 匹もの」を、当時流通していた「yarim böz = 半匹もの」と区別する必要のある契約文書等で、特に明記する場合であったことを述べた。またこのような規格保証という観点から見ると、iki bayliḡ 表現に先立つものとして、quanpu にかかる iki uči kinlig や böz にかかる ikilig も同様の機能を有する一連の表現である可能性に言及した。

ウイグル文書中の棉布の厳密な規格については、同文書にみられる「尺」の語⁽³⁵⁾などを手掛かりに敦煌・トゥルフアン出土の漢文文書も参照し、別途、価格体系なども念頭に置いた詳細な検討が必要である。また、従来麻布を指すとされてきた敦煌漢文文書中の「官布」が、実は棉布であるという指摘が近年なされている〔劉1995, 鄭&楊1997〕。もしもこれが正しいとすれば、quanpu と「官布」とを併せてこれを新たな考察の対象に加えねばならない。さらに、iki yarim bayliḡ böz の問題については未解決のまま保留している。

トゥルフアンの棉布の規格の実際を描くにはなお多くの課題が残されているが、本稿にて iki bayliḡ 表現の成り立ちや機能が幾分でも明らかになったとすれば、それを手掛かりとして今後、より明確な規格体系の再構築を試みたい。

参考文献・略号

- 荒川正晴 1994:「書評:山田信夫著、小田壽典・P. ツィーメ・梅村坦・森安孝夫編『ウイグル文契約文書集成』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、『史学雑誌』103-8、109-119頁。

- アリバウム, L. I. 1980: 加藤九祚 (訳) 『古代サマルカンドの壁画』、文化出版局。
- 影山悦子 2002: 「ソグディアナにおける絹織物の使用と生産」、『オリエント』 45-1、37-55頁。
- 勝藤猛 1980: 「アフガニスタン農村の若者」、『オリエント』 23-2、210-222頁。
- 加藤定子 2002: 『中央ユーラシア古代衣服の研究—立体構成の起源について—』、源流社。
- きもの用語: 装道きもの学院 (編) 『きもの用語大辞典』、1979、主婦と生活社。
- 佐藤武敏 1974: 「唐宋時代における絹織物の規格」、『集刊東洋学』 31、40-67頁。
- 慈恩伝: 「大慈恩寺三藏法師伝」 < 『大正新脩大藏經』 第50巻、(史伝部 2033)。
- 釈録: 唐耕耦・陸宏基 (編) 『敦煌社会経済文献真蹟積録』 5 輯、1986-1990、全国図書館文献縮微複製中心・古佚小説会。
- 十三経: 鄭玄 (注)・孔穎達 (疏)・十三経注疏整理委員会 (整理)・馬辛民 (責任編集)、『十三経注疏整理本 14 礼記正義』、2000、北京大学出版社。
- 鈴木俊 1965: 「匹 (疋) と端」、『石田博士頌壽記念東洋史論叢』、291-296頁。
- 大漠和: 諸橋轍二 『大漠和辞典』 12巻、大修館書店。
- 大詞典: 漢語大詞典編輯委員会 『漢語大詞典』 10巻、上海、上海辞書出版社。
- 竹内照夫 1977: 『新釈漢文大系 礼記 (中)』、明治書院。
- 鄭炳林&楊富学 1997: 「敦煌西域出土回鶻文文献所載 qunbu 与漢文文献所見官布研究」、『敦煌学輯刊』 1997-2、19-27頁。
- 吐魯番: 国家文物局古文獻研究室・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系 (編)、『吐魯番出土文書』 10巻、1981-1990、文物出版社。
- 林巳奈夫 1976: 『漢代の文物』、京都、京都大学人文科学研究所。
- 樊昌生 2002: 「第七部分 南昌寧靖王夫人吳氏墓」、『紡織品考古新發現』、

- 香港、芸紗堂、174-203頁。
- 日野開三郎 1989：「唐代庸調の布絹課徴額と匹端制」、『日野開三郎東洋史学論集』第12巻、三一書房、64-95頁、(初出：『法制史研究』15、1965、31-63頁)。
- 紡織品考古：趙豊（主編・織物分析）、『紡織品考古新発見』、2002、香港、芸紗堂。
- 馬王堆：湖南省博物館・中国科学院考古研究所（編）・関野雄他（訳）、『長沙馬王堆一号漢墓』（上・下）、1976、平凡社。
- 松井太 1997：「書評：S.-Ch. Raschmann, *Baumwolle im türkischen Zentralasien*, Wiesbaden 1995」、『内陸アジア言語の研究』XII、99-116頁。
- 2005：「ウイグル文契約文書研究補説四題」、『内陸アジア言語の研究』XX、27-64頁。
- 森安孝夫 1989：「ウイグル文書簡記（その一）」、『内陸アジア言語の研究』IV、51-76頁。
- 1992：「ウイグル文書簡記（その三）」、『内陸アジア言語の研究』VII、43-53頁。
- 1994：「ウイグル文書簡記（その四）」、『内陸アジア言語の研究』IX、63-93頁。
- 2004：「シルクロード東部における通貨—絹・西方銀銭・官布から銀錠へ—」、『中央アジア出土文物論叢』、京都、朋友書店、1-40頁。
- 山田信夫 1965：「ウイグル文貸借契約書の書式」、『大阪大学文学部紀要』11、87-216頁、(再録：SUK vol.1, pp. 75-209)。
- 劉恵琴 1995：「從敦煌文書中看沙州紡織業」、『敦煌学輯刊』1995-2、49-54頁。
- Clauson, G. 1972 : *An Etymological Dictionary of Pre-thirteenth-century Turkish*, Oxford, Clarendon Press.
- Dankoff, R. & Kelly, J. 1982-1985 : *Mahmūd al-Kāshgarī. Compendium of the Turkic Dialects (Dīwān Luyāt at-Turk)*, 3vols., Harvard University.
- Mode, M. 1993 : *Sogdien und die Herrscher der Welt, Türken Sasaniden und Chinesen in Historiengemälden des 7. Jahrhunderts n. Chr. aus Alt-Samarqand*, Frankfurt am Main, Berlin, Bern, New York, Paris, Wien.

Raschmann, S.-Ch. 1995 : *Baumwolle im türkischen Zentralasien : Philologische und wirtschaftshistorische Untersuchungen anhand der vorislamischen uigurischen Texte*. (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica, Vol.44), Wiesbaden, Harrasowitz Verlag.

Stein, A. 1921 : *Serindia*, 5vols., Oxford, Clarendon. (Repr.: Delhi, 1981).

SUK : 山田信夫 (著)・小田壽典・P. ツィーメ・梅村坦・森安孝夫 (編)、『ウイグル文契約文書集成』3vols., 1993、大阪、大阪大学出版会。

Sylwan, V. 1949 : *Investigation of Silk from Edsen-Gol and Lop-Nor and a Survey of Wool and Vegetable Materials*. (The Sino-Swedish Expedition 32), Stockholm.

註

- (1) それらの例は枚挙に暇が無い。個々の具体例は[SUK vol. 2]等を、網羅の一覧については[森安2004:10-13]を参照のこと。
- (2) [Clauson 1972:310]によれば、“‘bond, tie, belt’, and the like; also ‘something tied or fastened together, bundle, bale’, etc.”等とある。
- (3) その文書には「将来37 bōzを手渡すことを約し、その bōzについて bu bōz iki bayliq bōz ol「この棉布は、2束ものの棉布である」と特記して」ある[山田1965:98]。SUKのMi23参照。
- (4) [日野1989][鈴木1965]で詳細に論じられている。
- (5) 《唐縹布帳》64TAM35:22の記載に基づく[吐魯番7:490-491]。
- (6) 荒川氏が「端もしくは匹」とするのは、棉布に対し、絹に準ずる匹あるいは布に準ずる端のどちらを用いたケースも出土文献などから想定されるためである。
- (7) 例えば[日野1989:68]。『大漢和辞典』や『漢語大詞典』といった辞典でも端を「布帛の長さの称」だとしている[大漢和8:722][大詞典8:394]。
- (8) 「納幣は一束、束は五兩、兩は五尋(婚禮の納幣には一束を用いる。一束は五兩。幣一兩の長さは五尋である。)」[竹内1977:656-657]参照。
- (9) 同箇所は版本により多少の異同がある[十三経:1435-1436]。特に「一兩五尋」を「五兩五尋」とする箇所は注意を要するが、内容の整合性

を考え解釈すればやはり前者を採用するべきであろう。

- (10) 7世紀～8世紀初頭にかけて、トハリスタン王に従属するスルハン
ダリヤ川流域の半独立の国家 [アリバウム1980: 66]。
- (11) この壁画の中国あるいは東トルキスタンからの使者と考えられる男
性像2人も、厚く巻いた織物（無地？）の反物を3重ねずつ手にしてい
るが、それが両端巻きか否かは残念ながら不明である [アリバウム1980:
69]。
- (12) ただし、晋代の織物の反物としてスタイン (Aurel Stein) 氏が楼蘭で
発見した黄色い平絹 (L.A.I.002) は注意を要する [Stein 1921: 373-374,
432-433, Pl. XXXVII]。これは長さ約47.6cm、直径6.35×2.54cmの巻物の形
をしていたが、両端巻きではなく、片端巻きの形状である。これについ
ては①もとから片端巻きであった②もとは両端巻きであったものが2つ
に裁断されその片方が残った、という可能性が考えられ、現時点ではそ
の本来の形状を即決できない。
- (13) [佐藤1974]。本稿では単位を cm に換算し、小数点以下を四捨五入
して表記している。
- (14) 経糸の長ささえ確保できれば、という条件下である。例えば長さ数
百メートル以上に及ぶ絹繊維を経糸とするならば、理論上は数百メー
トルの長さの織物が織成可能となる。
- (15) 加藤定子氏による詳細な採寸図があるが [加藤2002: 170-176]、小
断片の剥ぎ合わせを含む複雑な縫製がなされており厳密な着分の計算は
現時点では困難でもあるし、またここでは必ずしも必要ではない。よっ
て (総裾回り×着丈) + (袖回り×袖丈) × 2 = (237×139) + (20×
30×2) = 34,143cm² を着分の概算として、これを56cm 幅の反物に換算
した。
- (16) 註 (15) と同様の計算方式により、(総裾回り×着丈) + (袖回り×
袖丈) × 2 = (266×122) + (24×48×2) = 34,756cm² を着分の概算と
して、これを56cm 幅の反物に換算した。長衣の寸法と構成図については
[Sylwan 1949: 75] を参照。
- (17) 近現代の例で、1970年アフガニスタンでの調査報告中、一般の村民
である男性の回答者が「シャツとズボンの1着分で棉布7mが必要」と

- 明言している [勝藤1980:213]。幅に言及されていないのは残念であるが、着分には時代・地域や服飾文化の違いを越えた一定の基準量があり、その意識が人々に浸透していることを予想させる一例である。
- (18) 隋唐時代に徴税のために設けられたこの呼称は、必ずしも普遍的に定着しなかった可能性は高い。その導入後も、税制運用の場面を除いては織物一般がなべて匹制で行われていたことは既に日野氏の言及するところであるが [日野1989:67, 72]、これは織物の形状表現としての匹の語の強固な地位やその社会への浸透ぶりを示すとも考えられる。また後代については、日野氏は長興元 (930) 年の勅令に「每二丈爲段。四丈爲匹。五丈爲端」(『五代会要』) とあることから、従来は同義であった「段」と「端」を区別し、4 丈匹・5 丈端の唐製の匹端制が存続しつつも、「段」が2 丈=半匹という先秦の匹端制に通ずる1 匹2 段の制度が伝えられていることを指摘している [日野1989:71]。これは、10世紀の中国内地においても反物の形状として両端あるものを1 匹とする認識が深く浸透しており、あえて税制上の絹匹布端の製の「端」と区別せねばならなかったことを物語るのではないだろうか。
- (19) 1 件「張」が用いられた文書 (75TKM88:1(b)) があるが [吐魯番 1:181]、これは明らかに規格外の品に対する量詞であり、除外して良からう。
- (20) 古来からの当地における漢文化の影響を考えれば、既にそれ以前に何らかの形で中国の両端巻きの形状が取り入れられていた可能性も高いが、それを確実視できるのはやはり640年以降ということになろう。なお、唐制が導入されたとはいえ、例えば税額などの面で、それが厳密に施行されたか否かについては別に論ずる必要がある。
- (21) 例えば SUK では bayliq という読みを採用し、一方、ラシュマン氏は baylīy という読みを行っている。
- (22) [森安1992:46-47] に、諸研究による要点が明快にまとめられている。
- (23) SUK の Sa06, Sa07, Sa09 など。
- (24) böz の修飾語句として「数字 (+yarim)」のみを冠した例を含む文書が52点、それに加えて別の修飾語句 (tas「粗悪な」、qalin「厚手の」など)

- も付いた例を含む文書が24点であった。なお、問題としている iki bayliṣ 表現はここから除外している。
- (25) トゥルファン漢文文書では上述の《唐縹布帳》、註(5)を参照。敦煌漢文文書では《納贈曆》P.3250〔積録1:371〕など。なお、《唐縹布帳》での実際の文言は「半端」であるが、本文では古来の匹端制に則った表現に統一して「半匹もの」と言い換えた。
- (26) 一連の yarim 表現において yarim を一種の独立した計数単位と見なし、「数字(X)+yarim böz」を「 $(X+0.5)$ 匹」ではなく「半匹ものをX個」の棉布と解釈することも、あるいは可能かもしれない。ただし、yarim 表現の用例では22件中15件までが、「yarim böz」のみであって数字を全く伴っていないため、慎重に検討する必要がある。
- (27) 接尾辞+liṣ を伴わない bay は、厳密には bayliṣ とは異なる言語学的機能を有するであろうが、その文書例(Sa10 L.5, Lo15 L.3)を見る限りでは、両者の用法は同一と考えられる。特に Sa10において2行目で iki bayliṣ と綴られたものが5行目では iki bay と書かれている例は、後者が前者の、省略や書き誤り等を含めた何らかの変化形であることを示唆しよう。
- (28) 5文書は、それぞれ SUK の Sa09, Sa10, Sa29, Lo15, Mi23。なお、iki yarim bayliṣ (Mi20) という表現については、研究史の部分で紹介したように松井氏はその長さに関してきわめて整合性の高い解釈を既に提示しているが、この小論では規格の実際の寸法については踏み込まないためその検討を保留とし、bay/bayliṣ の用例からは除外する。
- (29) 文書の性質は〔松井2005:28-35〕参照。
- (30) ラシュマン氏の Text-Nr. 76に yirmi bayliṣ böz という表現があるが、文書の該当箇所は不鮮明であり、なお再考の余地ありとの様子であるため除外する。
- (31) ただし、中国内地で税制上設けられた厳密な長さを規定する唐の絹匹布端制と無条件に一致させることはできないものの、「1匹もの」を指す以上、(具体的数値はひとまず措くとしても)当該時期のトゥルファンにおいて認められた規格を結果的には含意していたことは言うまでもない。

- (32) SUK の Sa06, Sa07、また、語彙集の *ikilik* の項を参照 [SUK vol.2 : 258]。
- (33) *ikilik* が「2つ（の端）を具えた」と解釈できるのならば、*iki bayliq* の場合と同様その接尾辞は *+lig* となり、*ikilig* と読むのが適切であろう。なお、SUK では *ikilik*、ラシュマン氏は *ikilig* と読んでいる。
- (34) カラハン朝出身の学者カーシュガリーの辞書に *quanpu* の項目が立つ。*quanpu* にはウイグル王の印が押印されていることや、7年ごとに補修・洗浄されて新たに押印をすることなどが記される [Dankoff & Kelly 1982 : 317]。西ウイグル王国内外に流通した *quanpu* の総量はおそらく膨大なものであり、それらの品質維持のために費やされる労力は相当であったと思われる。それを支える国家の強固な意志と体制があったことを充分窺わせる。
- (35) 尺にあたる表現については [Raschmann 1996 : 44-46] を参照。